The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞ ソルリの話とヘジンとホグニのサガ
Author(s)	菅原, 邦城
Citation	大阪外国語大学学報. 1978, 41, p. 111-130
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80703
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ソルリの話とヘジンとホグニのサガ

菅 原 邦 城・訳注

SÖRLA ÞÁTTR EÐA HEÐINS SAGA OK HÖGNA

Translated from the Old Icelandic with notes

by Kunishiro Sugawara

The short story here translated into Japanese is one of the so-called *fornaldarsögur* or sagas of antiquity, written during the thirteenth century and later, about Norse heroes who were believed to have lived before the settlement of Iceland about A.D. 900. Although they "represent the oldest type of oral-"literary" form" (Stefán Einarsson: *A History of Icelandic Literature,* New York 1957, 123), sagas of this group, in comparison with *konungasögur* or *Íslendingasögur,* are among the latest to be written down in mediaeval Iceland. As might be easily understood, the fornaldarsögur, notwithstanding their comparatively late date of literal composition, preserve ancient tradition of the Germanic peoples, which *Völsunga saga, Hervarar saga ok Heiðreks, Ásmundar saga kappabana, Örvar-Odds saga,* for instance, certainly prove. Our story also preserves some archaic elements; most of the names of the þáttr are found in Old English poems, *Deor* and others, and the Hjaðnings' battle of the saga is known to the early ninth-century Norwegian poet Bragi the Old, the late twelfth-century Danish clerk Saxo Grammaticus and the early thirteenth-century Icelandic scholar Snorri Sturluson. This Icelandic story is handed down to us in the famous saga compilation *Flateyjarbók,* ca. 1390. Considering the author's profane treatment of pagan deities and his making a Christian warrior surpass pagan heroes, we can safely assume that this is a Christian work and should date from some time not so much earlier than the compilation of the Flateyjarbók. To see how the content of the saga was summed up in the first decades of the thirteenth century, we have also translated the related part of *Skáldskaparmál,* 'Speech of poetry', of Snorri's *Edda.* This translation is based on the editions of *Fornaldar sögur Norðurlanda,* Vol. I and *Edda Snorra Sturlusonar,* both provided by Guðni Jónsson; on these see further references following the Index of proper names with brief explanations.

Osaka, September 1977 *K. S.*

1．アシーアのヴァナクヴィースルの東方はアシーアランドとかアシーアヘイムと呼ばれていたが，そこに居住する人々はアースと呼ばれ，かれらは都をアースガルズと呼んだ。そこを支配する王はオージンという名だった。そこは大きな犠牲祭場であった。オージンはニョルズとフレイを供犠神官[1]に任じた。ニョルズの娘はフレイヤといったが，オージンといっしょに暮し，その愛人だった。

次のような男たちがアシーアにいた。ひとりはアールヴリッグ，二人目はドヴァリン，三人目はベルリング，四人目はグレールといった。彼らは王の館の近くに住んでいた。そして非常にたくみな腕の持ち主で，何を造るにも名人技であった。彼らのような類いの者たちを人々は侏儒（ドヴェルグ）と呼んでいた。彼らはひとつの石の中に住んでいた。その頃かれらは今よりも余計に人間と交わっていたのだ。

オージンはフレイヤを非常に愛していた。彼女は実際，その時代にあって一番美しい女だったのだ。彼女はひとつの女人館（スケンマ）を有していた。それは美しくもあり，頑丈でもあった。そして人々の語るところによれば，扉が閉じられ錠をかけられてしまうと，誰もフレイヤの意志に反しては館の内に入ることが出来ないという程のものだった。

ある日のこと，フレイヤはたまたま侏儒たちの石のところにやって来た。そのとき石は開いていた。侏儒たちは黄金の首飾りを一つこしらえていた。首飾りは，その時にはすっかり完成していた。フレイヤはその首飾りが大層気に入った。侏儒たちの方も，フレイヤが大層気に入った。フレイヤは侏儒たちに首飾りを買いたいと申し出，替りに金や銀やその他の立派な宝物を払うと言った。彼らは財宝は要らないと答え，一人びとり自分で首飾りの自分の持ち分を譲り渡したい，彼女が一夜づつ自分たち一人びとりと一緒に寝ること以外の支払いは欲しくないと語った。彼女は正しい方法であれ正しくない方法であれ首飾りを手に入れると言い，それで彼女と侏儒たちはこのことで取引きを結んだ。4夜がすぎ，条件が残らず満たされたとき，侏儒たちはフレイヤにその首飾り[2]を渡した。彼女は自分の館に帰り，何事もなかったかのように穏かにしていた。

2．ファールバウティという男がいた。彼は老人で，ラウヴェイという名の老婆を妻にしていた。彼女はやせてもおり，病弱でもあった。それでナール（針）と呼ばれていた。夫婦には一人息子があり，ロキという名だった。彼は体は大きくなかったが，はやくから言葉が辛辣で，動作はすばしこく，他の者たちよりも余計に，狡智という知恵をもっていた。ごく若くして甚だ狡猾であった。そのために〈悪巧みの〉ロキと呼ばれていた。彼はアースガルズのオージンのもとに赴き，その部下になった。オージンは，ロキが何をしようが，何事でもその肩をもった。オージンはしばしばロキに厄介な骨折り仕事を課したが，ロキはそれを予想よりもうまくやってのけた。彼はまた，出来事にはほとんど残らず気づき，自分の知っていることは全部オージンに知らせた。

フレイヤがその首飾りを手に入れたこと，彼女がそれに対して何を支払ったかということ，このことをロキが知るようになったと言われている。彼はこれをオージンに知らせた。オージンは

そのことを確かめると，ロキにその首飾りを手に入れて自分に渡せと命令した。ロキは，何ぴともフレイヤの意志に反しては彼女の館に入ることが出来ないのだから，その命令はうまくいきそうもないと答えた。オージンは，お前はなんとしても行き，首飾りを手に入れないうちは戻ってくるなと言った。するとロキは叫びながら去っていった。おおかたの者は、ロキにとって不首尾に終る物事を面白がった。

ロキはフレイヤの館に行くが，館には錠がおろしてあった。彼はなかに入ろうとしてみたが，出来なかった。外はひどい寒さで，彼はますます寒くなりだした。このとき，彼は一匹のハエになった。そうして，錠全部のぐるりと窓枠全部にそって飛びまわったが，内にもぐり込めるような隙間を探し出すことは出来なかった。上にあがって屋根の棟のあたりを飛んでみると，針も突き刺せないような小さな穴が見つかった。その穴のなかにもぐり込んでいく。そして内に入ると彼は目を大きく見開いて，目をさましている者がいないかどうか注意して見たが，館のなかでは何もかも眠っているのを知ることが出来た。それから奥に入ってフレイヤの寝台のそばに行き，彼女が首飾りを首にかけ，その留め針は首の下になっているのを見てとった。そこでロキは一匹のノミに姿をかえた。彼はフレイヤの頬にあがって刺し，そのためフレイヤは目をさまして寝返りをうち，そしてまた眠る。その時ロキはノミの皮をわが身から剝ぎとって，彼女から首飾りをはずした。そうしてから館を開けて去っていき，オージンに渡すのだった。

朝になってフレイヤは目をさまし，戸口が開いているのに破られていないのを見つけ，例の見事な首飾りが消えてしまっているのを知る。彼女は，そのことで如何なる策略があったか見当がつき，身仕度をすると，大広間に入っていってオージン王の前に出る。そして，自分の貴重品を自分から盗みとる悪事を王がやらせたと言って，自分の貴重品を返してくれるようにと求めるのだった。

オージンは，彼女がそれを手に入れたような具合には絶対それは返してもらえないと答える——「だが，次のことをお前ができれば別だ。それは，それぞれに20人の王が仕える２人の王が不仲になり，王たちが闘って，倒れるのと同時にまた起ちあがって戦闘するという呪いと魔力をかけられて相たたかい，これは，誰かキリスト教徒の者が非常に勇敢になり，そしてその者にその主人のたいへん大きな好運がつき従って，その王たちの戦いに加わってこの連中を武器で殺すだけの勇気をもつ者が現われるまで続くというものだ。その時になってはじめて王たちの激戦は，その悲惨な行為の難儀と苦労から連中を解き放す定めにあるいずれかの首領によって，終いにされるのだ。」

フレイヤはそれを承知して，首飾りを受取った。

3．〈平和の〉フロージの戦死から24冬が過ぎ去っていた時期に，エルリングという名の王がノルウェーのウップランドを支配していた。王には妃とふたりの息子があった。年上の息子は〈強者〉ソルリといい，年下のはエルレンドといった。ふたりは前途有望な男であった。ソルリはふたりの中で一番強かった。兄弟は成年になると掠奪に出かけた。彼らはシンドリ〈ヴィーキング〉

と戦った。これは，エルヴァルスケルの水軍王[3]ハーキの息子スヴェイギルの息子だった。そして，そこでシンドリ〈ヴィーキング〉とその全軍が倒れた。その戦闘でエルリングの子エルレンドも倒れた。それの後ソルリは東海に行って，そこを荒し，数々の手柄をあげ，それらを残らず書いていたら手間取ってしまう程だ。

4．ハールヴダンという王がいた。デンマークの支配者だった。彼はフローイスケルダという町に居住していた。彼は大フウェズナを妻にしていた。彼らの息子はホグニとハーコンだった。ふたりは背丈や力やあらゆる行為について優れた男であった。兄弟は大人になると掠奪に出かけた。

話はソルリに戻さねばならない。彼はある秋デンマークに向う。その頃ハールヴダン王は諸王の会合に出向く心づもりをしていた。この話のことが起ったころ王はとても年寄っていた。彼は非常に見事な軍船[4]をもっていたが，強靱ぶりと名細工の故にそのような船は北欧では外に二つと見当らない程のものだった。その船は港に繋がれていたが，ハールヴダン王は陸上にあって，航海中に使う自分のビールを造らせていた。しかし，ソルリがこの軍船を目にしたとき，彼の心中に我欲が起り，何としてもこの船をわが物にしたいと思ったのである。たしかに大多数の人たちの話によれば，船でこれに勝る貴重なものはなく，これは北欧では奪われた諸船，エッリジ号やグノズ号や長蛇号とならぶということだ。

このとき，ソルリは部下たちに戦闘の準備をするように命じた――「われらはハールヴダン王を殺してあの軍船を手に入れねばならぬからだ。」

彼のこの言葉に，セーヴァルという男が答える。これはソルリの船首楼大将[5]であり，執事[6]であった。「殿，それは賢明な考えではございません」と彼は言う――「何故ならば，ハールヴダンは大首領であり，名高い人物だからです。王には，父の仇を討つ覚悟をしている二人の息子がございます。といいますのも，それぞれ甚だ名高い人物でありますから。」

「二人がたとい神々よりも優れていようとも」とソルリは言った――「これまでと同じ風に戦うぞ。」

こうして，彼らは戦闘の準備をする。それからハールヴダン王に知らせがもたらされる。彼は即座に立ちあがって船に向い，家来も全員これに随い，ただちに戦闘の用意をする。ハールヴダン側のある者たちは，戦闘することは王にとって得策ではなく，劣勢の故に退くべきだと言った。王は，各人は逃げる前に他の者の上に折り重なって倒れるのだと答えた。こうして，双方ともに戦いの仕度を整え，きわめて激しい戦闘が始まり，ハールヴダン王とその手勢がひとり残らず倒れるという結果になった。そうしてからソルリはその軍船と，船上にあった値打ちのある物を全部わが物にした。

その後ソルリは，ホグニが掠奪から戻ってきてオージンセイの近くに碇泊していることを耳にした。そこに向けてソルリは船をやり，両者が出会ったとき，ソルリは相手に，その父ハールヴダンの戦死を告げて，和解と自己裁定権[7]，さらには盟友関係を申し出る。が，ホグニはそれをみな

拒んだ。その後彼らは「ソルリ短詩」に言われているように，相たたかった。ハーコンは非常に勇ましく前に撃って出て，ソルリの旗持ち[8]にして船首楼大将であるセーヴァルを殺した。それの後ソルリがハーコンを殺したが，ホグニの方はソルリの父エルリングを殺した。それからホグニとソルリが剣を交え，ソルリは疲労と手負いとでホグニの前に倒れたが，ホグニはその後ソルリの傷を手当てさせた。そして彼らは盟友の誓いをなし，二人とも生きている間はこの誓いをよく守った。二人のうちソルリが早く死ぬが，東海路でヴィーキングたちのために戦死したのだった。それは，「ソルリ短詩」の中でも次のように言われている通りである ——

いと勇ましく
戦さにはやる烈士は
東海路にて先立ち
黄泉に下りぬ。
そは　蛇(くちなわ)はぐくむ夏
戦士(もののふ)の名をばはせつ命はて，
刃(やいば)まじわる庭に鎧こぼつ剣(つるぎ)は
ヴィーキングの輩(ともがら)をあやめたり。

そして，ホグニはソルリの戦死を耳にすると，同じ夏に東海路で掠奪を行ない，到る所で勝利を得て，そこの王となった。人々の話によれば，20人の王がホグニの下で貢ぎ物を納める副王になって彼から支配権を授けられたという。ホグニは自分の目覚しい武功と掠奪によって甚だ名高くなり，北の方フィンの国でも遙か南のパリーでも，またこの二つの土地の間にあるいかなる所でも，同じようによくその名が知られていた。

5．ヒャッランディという名の王がいた。セルクランドを支配していた。彼には妃と，ヘジンという名の息子ひとりがあった。息子ははやくに力と背丈と才芸とで勇ましい男となった。若者のころに掠奪に出かけて水軍王となり，スパーニーアとグレーキア，そして近隣の諸国すべてを広く掠奪し，こうして20人の王を自分の下で貢ぎ物を納めさせるようにし，そうして彼らはみんな彼から領地封土を授けられた。ヘジンは冬はセルクランドに滞まっていた。

ある時，ヘジンが従臣団をひき連れて森に出かけたと言われている。彼は家来たちから別れて森のなかの空き地にきた。その空き地で背丈が大きく顔の美しい女が椅子にかけているのが見えた。彼女はヘジンに優雅な挨拶をした。彼は女に名前をたずねたが，彼女はゴンドゥルと申しますと答えた。それから二人は語り合い，彼女はヘジンに彼の手柄のことを訊くが，彼は相手に何でもありのままに話し，そして彼女に，勇気と大胆，高名と成功について自分とならぶ王がいるのを知っているかと尋ねた。

彼女は，あなたに劣らぬ方で，あなたと同じく20人の王さまが従属している方を知っておりますと答え，そして，その方の名はホグニといい，北の方デンマークに住んでおられますと言った。

「存じておる」とヘジンは言った――「王とわしが，いずれがまさっておるか試さねばならんことは。」

「ご家来方のもとに」とゴンドゥルが言う――「お戻りになられるお時刻では。みなさまは王さまをお探しでしょう。」

そうして二人は別れ，彼は家来たちのもとに行くが，彼女は空き地に残っていた。

春になるとすぐにヘジンは遠征の用意をし，一艘の軍船を使い，300人を乗りくませた。彼は世界の北を目指し，その夏と冬を航海する。次の春になってデンマークに到着した。

6．その頃ホグニは自分の王国にあった。そして，名高い王が自国に到着したことを耳にすると，彼はその王を，自分のもとの至極豪華な宴に招く。ヘジンはその招きに応じた。そして両者が酒を飲んでいた時ホグニは，ヘジンが世界のかくも遙か北方にやって来ることを欲したとは一体いかなる用件があってなのかと尋ねた。ヘジンは，自分の用件は自分たち二人がたがいに勇敢と度胸，技とあらゆる才芸を競(くら)べることだと答えた。そして翌日はやくに彼らは競技場に出，弓場に行った。彼らは馬上試合もし，武芸やありとあらゆる技を競い，どの才芸でも二人は同等で，誰にも，いずれがまさっているのか相違を見出すことは出来ないと思えた。

この技競べをしてから，二人は盟友の誓いをたて，あらゆる物をたがいに半分づつ分け合うことにした。ヘジンは若くて独り身だったが，ホグニは幾分年長だった。彼は，〈狼皮の〉ヘイズレクの息子ヒョルヴァルズの娘ヘルヴォルを妻にしていた。ホグニにはヒルドという娘があった。これは女の中でもっとも美しく賢かった。彼はわが娘を非常に愛した。さらに他の子供はなかったのである。

7．少し経ってからホグニは掠奪に出かけて，ヘジンはあとに残って王国を預ることになったと言われている。ある一日，ヘジンは慰みに森へ出かけた。天気はおだやかだった。彼はまた自分の家来たちからはぐれてしまい，森の空き地にやってきた。そこで彼は女が，以前セルクランドで会ったあの同じ女が，椅子にかけているのを目にした。そして彼には，女が前よりもずっと美しいように見えた。彼女は今度も先に彼に言葉をかけ，やさしく語った。手には角杯(さかずき)を握っており，それには蓋がしてあった。王は女に愛情を抱くようになった。彼女は彼に飲むようにすすめた。王は暑くなっていたので咽が乾いていて，杯を受けとって飲む。そして飲み終ると，彼はひどく驚いた。というのは，以前に起ったことを自分が何ひとつ覚えていなかったからだ。二人は坐ってたがいに語り合った。彼女は尋ねた――何か実際ヘジンに，自分が以前ホグニの腕前と度胸について彼に話した通りに，起ったかと。

ヘジンは，それは話の通りだったと言った――「彼は，ふたりがやってみたどの才芸でもわし

に劣らなかったし，それでわしたちは対等だとされたからだ。」

「おふたりは対等ではございません」と彼女が言う。

「それはどういう訳だ」と彼は訊く。

「その訳は」と彼女が言う――「ホグニ殿には立派な家柄の妃がおありですが，あなたには奥方さまがございません。」

彼は答える――「わしが求める気になれば，ホグニは直ちに姫のヒルドをわしの妻にくれる。そうすれば王よりも劣る結婚をしたことにはならん。」

「あなたのお値打ちは低くなります」と彼女が言う――「もしもホグニ殿に結婚のよしみをお求めになられますならば。それよりも，あなたがお見かけどおりに勇気も度胸も不足なくお持ちなのでしたら，ヒルド殿を奪い去り，お妃の方は捕えて軍船のへりの下に置いて船を水に浮べたときにばらばらに切らせるという風にして殺す方がよろしいでしょう。」

ヘジンは自分が飲んでいたビールのために邪悪へとひきずり込まれ，忘却にかかってしまって，このこと以外の何も良策とは思えず，またホグニと自分とが盟友であることも思い出さなかったのである。

それから二人は別れて，ヘジンは自分の家来たちのもとに行った。これは夏の終りのことだった。この時ヘジンは家来たちに軍船の準備をするように命じる。自分はセルクランドに帰るつもりだからだと語った。それから彼は女人館に行って，両の手それぞれに妃とヒルドをつかまえて，連れ去る。家来たちはヒルドの衣服と貴重品を取った。王国には，ヘジンが非常に不機嫌な面をしていたので，彼とその家来たちを恐れて敢えて何かをやろう等できない者たちだけしか残っていなかった。

ヒルドはヘジンに，何をしようとしていらっしゃるのですかと尋ね，彼は彼女に返答した。彼女はそうしないように頼んだ――「と申しますのは，もしあなたが私をご所望なさるおつもりでしたら，父上は私をあなたに妻として下さるでしょうから。」

「そなたを所望することは」とヘジンは言う――「致すつもりはない。」

「私をつれ去ること以外は何も」と彼女が言う――「なさるおつもりはないとしたら，父上とあなたはそれでも仲直りできるでしょう。ですが，あなたが母上に，殺害をなさる程の悪事と卑劣をおはたらきになれば，父上とあなたは決して仲直りできないでしょう。私はこんな夢をみました。おふたりが闘っておたがいに相手を斬り倒し，それでも他のもっと重大なことが起るでしょう。もし私が父上にお会いし，そして父上が侮りと大きな呪いをお受けにならなければいけないのを見るとしましたら，私には大きな悲しみとなりましょう。ですが，あなたが悪意と厄介なことにとらわれていらっしゃるのを見るのも，私には何の喜びでもありません。」

ヘジンは，後でどんなことが起ろうなど自分は頓着せぬと答え，自分は前に決めたようにするのだと言った。

「なさってはいけません」とヒルドは言う――「あなたのお力では自由にならないことですか

ら。」

そのあとヘジンは海辺に行った。そうすると軍船は水に浮べられた。このとき彼は妃を船べりの下に押しやった。そこで彼女は命を落したが，ヘジンの方は軍船に乗る。

そして，彼がすっかり仕度できたとき，彼は家来たちから離れて陸にあがって，以前に行ったあの同じ森に出かけたくなる。彼があの空き地までやって来ると，そこにはゴンドゥルが椅子にかけているのが見えた。ふたりは親しく語り合った。彼は彼女に，自分のしたことを話した。彼女は，よくなさいましたと言った。彼女はそこに，前に持っていた角杯（さかずき）を持っていて，彼に飲みほすように勧めた。彼は受けとって飲むが，飲み終ると，眠気がおそい，彼は彼女のひざに崩れかかった。

彼が眠ってしまうと，ゴンドゥルはその頭をのけて言った――「オージンが求めたあらゆる魔力と条件のもとでお前を，ホグニとお前を両方とも，そしてお前たちの軍勢をみんな殺してやるぞ。」

その後，ヘジンは目をさましてゴンドゥルの影を見，それは彼には黒くて大きく見えた。今になってヘジンはすべてのことを思い出し，自分の悪事を由々しいものと思い，自分の悪業に対するとがめだてを毎日聞かされることがないよう少し遠くに行くことを考え，こうして船に戻って，すぐに係留綱から船を離させ，陸から追風がき，彼はヒルドを連れて船で去っていくのであった。

8．さてホグニは帰国し，ヘジンがヒルドと軍船〈ハールヴダンの贈物〉を奪い去って妃は殺害のうえ置き去りにされている事実を知った。これを非常に怒って，ホグニは家来たちに直ちに出立して船でヘジンを追うよう命じた。家来たちは命令のようにし，一番に好都合な追風を得て，ヘジンが朝方さきに出た港に，いつも夕方にやって来るのだった。

ホグニが港に向っていたある日，ヘジンの船の帆が海上に見えることとなった。その時ホグニたちは直ちにそのあとを追う。この時ヘジンは正面に向風を受けたがホグニの方には同じ追風が続いていたことが，事実だったと言われている。ヘジンはその時，ハーという島に船を寄せて，そこに錨をおろす。

すぐにホグニが追いつき，そして彼らが会うと，ヘジンはねんごろに挨拶した。「貴殿に話さねばならないことがある，盟友よ」とヘジンは言う――「甚だ由々しい悪事がわしにふりかかり，それは貴殿以外には償うことが出来ぬのだ。わしは姫と軍船を奪い，お妃の命をなきものにした。が，それはわし自身の悪意からではなく，邪しまな予言と凶い呪いによってなされたのだ。今となっては，貴殿だけがわしたちの間のことを決めてくれればと思う。ヒルド殿も軍船も，ご家来みんなも財物もお返しし，わしが生きている間は二度と北欧の地に参って貴殿の目に触れることのないよう世界のはてに行くことを，貴殿に申しあげたい。」

ホグニは答える――「貴殿がヒルドを求めたならば，妻として差上げたものを。今でも，貴殿はヒルドをかどわかしはしたが，そのことならば貴殿とわしは和解はできよう。が，貴殿が妃に対

して卑劣なふるまいに及んであれを殺す程の重大な悪事を行なった以上，わしが和解を承知する見込みは一つとしてない。わしたちは直ちにこの場で，いずれの側が人斬りを自慢できるか試みねばならぬ。」

ヘジンは答える[9]——「貴殿が戦うより他のことを望まぬならば，わしたち二人がたがいを試すのがいい。この件では，貴殿はわし以外の誰をも責められぬからだ。わしの罪と悪事の償いをせずともいい者がそうするのは，よろしくない。」

双方の従者たちはみな異口同音に，剣を交えて自分が一撃を食らうよりも先に敵を次々に倒すと答えた。しかしヘジンは，ホグニが戦うより他のことは望んでいないのを見ると，自分の家来たちに浜に行けと命じた。「もはやわしはホグニに対して譲ることも，戦闘を遠慮することもせぬ。一人びとり男らしく全力をつくせよ。」

そうして彼らは浜に行って，闘いあう。ホグニは非常に猛り狂った。しかしヘジンは，武器はたくみに扱い，また激しい打撃も与える。この呪いには甚だ大きな魔力と悪意がついていて，彼らは肩を斬り裂かれても再び前のように起ちあがって闘いあったと，確かに言われている。ヒルドは茂みのなかに坐って，この戦いを眺めていた。

この災難と難儀とは，彼らが闘い始めたときから絶えずに続いて，トリュッグヴィの息子オーラーヴがノルウェー王になる時まで止まなかった。人々の話によれば，この名高い人物，オーラーヴ王に，彼の一人の従臣がこの悲惨な災いと有害な苦悩から彼らを解き放すことが定められるまで，140と3年の年月があったという。

9．オーラーヴ王の支配の初年に，王はハー島に寄ってそこに一晩錨をおろしたと言われている。見張りの者が夜な夜な姿を消してどうなってしまうのか分らないということが，今いった島のならわしだった。この夜は〈光の〉イーヴァルが見張りをすることになった。

そして，全員が船で寝てしまった時イーヴァルは，ヤールンスキョルドが持っていたもので，息子のソルステインが自分にくれた剣と，自分の鎧を取って，島にあがっていった。島に上陸すると彼は，ひとりの男が自分に向って来るのを見た。男は背丈が大きく，全身血まみれで，ひどく深刻な顔をしていた。彼は，自分はヘジンといってヒャッランディの息子，セルクランドの生れだと答えた。「ここでは夜番が行方不明になっているが，それがわしの，わしとハールヴダンの息子ホグニとのせいだと，貴殿が聞いているのはその通りのことだ。というのも，わしたち二人とわしたちの家来は甚だ大きな魔力と難儀に出くわして夜も昼も闘いあい，こうして幾代も経っているからだ。ホグニの娘ヒルドはそれを眺めている。このことをオージンがわしたちに定めて，誰かキリスト教徒の者がわしたちと闘う外には救いがなく，その時はそのキリスト教徒が殺す人間は生き返らず，そうされた者はみな自分の難儀から解き放たれるのだ。貴殿にお願いしたい，わしたちとの戦闘に来てくだされ。貴殿がたしかにキリスト教徒であること，さらに，貴殿がお仕えの王が大いなる好運の持ち主であることを存じておるからだ。王とそのご家来衆から善いこと

を授けられるのを，予め知っておるのだ。」

イーヴァルは相手についていくことを承知する。それにヘジンは喜び，語った――「気をつけてもらわねばならぬのは，前方からホグニを攻めぬこと，第二に，わしが先に死んでしまえばホグニを正面から攻めたり殺したりするのは人間には出来ぬからホグニよりも前にわしを殺さぬこと。人間にそう出来ない訳は，ホグニは恐怖におののかせる目をしていて何ものをも容赦せず，そして，そのためにわしが彼を正面から攻めて闘うことしかないのだ。が、貴殿は彼の背中を攻めて最期の一撃を加えるのだ。というのも，わしはわしたちの中で一等長生きはするものの，貴殿にとってわしを殺すことは造作もないだろうからだ。」

そうしてから二人は戦闘に赴き，イーヴァルは，ヘジンが自分に語ったこのことが残らず本当であるのを見てとる。彼はホグニの背中を攻めて，その頭に斬りつけ，その肩を斬り裂く。するとホグニは死に倒れ，その後再び起ちあがりはしなかった。そのあと彼はそこで，戦闘に加わっていた者たちを全部殺したが，最後の最後にヘジンを殺す。そして，それは彼にとって造作もなかった。こうして後イーヴァルは船に戻るが，そのとき夜が明けた。彼は王のもとに行って，知らせた。王は彼の行ないをよしとして，彼は好運にも上首尾をとげたと語った。

あとで日中に彼らは陸にあがり，戦闘があった所まで来るが，そこで，起った出来事の跡はどこにも見えなかった。しかし，イーヴァルの剣に証拠として血が見られ，そしてその後そこでは二度と見張人が行方不明になることはなかった。王はこの出来事のあと，自分の王国に帰った。

訳　注

(1) blótgoði　供犠を中心とする異教の祭式（blót）を司る。犠牲として，古く北欧で動物だけでなく人間も捧げられたことはブレーメンのアダム（Adam Bremnsis: *Gesta Hammaburgensis ecclesiae pontificum*, ca. 1070）やスノッリ（Snorri Sturluson: *Ynglinga saga*, ca. 1230）等の作品から知られる。スノッリによれば，オージンはかつて年3度，豊年（初冬）と五穀豊穣（真冬）と武運長久（夏）を祈願して犠牲を捧げたという。なお，本文と全く同じ一節が，スノッリ「ユングリンガ・サガ」第4章にある。

(2) 付録として訳したスノッリの作品において，和解のために申し出たとされている首飾りと同じであろう。（「〈毛ズボン〉ラグナルの頌歌」11節も参照。）これはBrísingamen（エッダ詩「スリュムの歌」12, 15）とか Brōsinga mene（英国最初期の詩*Beowulf* 1199）と呼ばれる伝説的な絶品。フレイヤは，首飾りを手に入れるために男と寝たと，ロキによっても暴露されている（エッダ詩「ロキの口論」20）。

(3) sækonungr 上記注(1)のスノッリ作サガ（第30章）で，「大軍を治めつつ領土を有せぬ」水上の覇者とされ，彼は「決して煤だらけの梁の下では眠らず，また竈の隅では飲まない」。

(4) dreki　船首が竜（dreki）の姿をしている最大の軍船，「竜頭船」。文献にのみ見られ，考古学的には未だその実在を証明されていない。

(5) stafnbúi 戦闘用の船で船首楼（stafn）に場所を占める特に優秀な戦士。

(6) stallari（<古英語 stallare<ラテン語 stabularius）国王第一の近侍。従臣団に対しては王の代弁者であり，王に対しては従臣団の代表であった。

(7) sjálfdœmi ノルウェーやアイスランドの法律用語としては，相対立する両当事者の一方が他方に一方的に解決方法の決定を認めることをいう。しかしながら，本作ではもっと一般的に用いられている。

(8) merkimaðr 本来は，戦闘で軍旗（merki）を捧げもつ兵士を意味するが，本文の用法はかなり後代のもので，stallari eða merkimaðr と並称されるような国王近侍中の筆頭者を指す。

(9) 「答える」（*svarar*）は底本の*varar*「警告する」にとって替えたもの。この誤植を写本によって確認して下さったProfessor Jónas Kristjánsson（Stofnun Árna Magnússonar á Íslandi, Reykjavík）に感謝したい。

〈付録〉　スノッリ「詩語法」抜粋

「戦さ」は「ヒャズニングの嵐とか雨」と呼ばれ，「武器」は「ヒャズニングの火とか杖」と呼ばれているが，これの起りに一つの物語がある。

ホグニという名の王がヒルドという娘をもっていた。彼女を，ヒャッランディの息子ヘジンという王が掠奪した。そのときホグニ王は諸王の会合に出かけていた。しかし，自分の王国が荒され，娘が連れ去られたことを耳にすると，王は自軍を率いてヘジンの追及に出，彼が陸地にそって北に向ったと聞いた。ホグニ王がノルウェーに達したとき，王はヘジンが海を西にいったと聞いた。それからホグニはヘジンを追って航海してオルクン諸島に到り，ハー島という所に来ると，そこにはヘジンが自軍をつれていた。

このときヒルドは自分の父に会いにゆき，和解の印しとして父にヘジンの手から首飾りを申し出た。しかし彼女はことばをかえて，ヘジンは戦闘する用意があり，父上は彼からどんな情け容赦もあてに出来ないでしょうと語った。ホグニはわが娘にきびしい返答をする。そして彼女はヘジンに会うと，父は和解する気は毛頭ありませんと話し，戦さの用意をするように頼んだ。こうして双方は戦闘の仕度をし，島に上がり，戦闘隊形を整えさせる。

このときヘジンは舅のホグニに呼ばわって和解を申し込み，償いとして沢山の黄金を申し出た。

するとホグニが答える――「もし和解をするつもりがあるというのなら，この申し込みは手遅れだ。もうわしは〈ダーインの遺産〉を抜いてしまっとるからだ。この剣は侏儒どもが鍛え，抜身になる度ごとに人を殺(あや)めずにはおかず，攻撃では遠慮を知らない。これでかすり傷でも負おうものなら，どんな傷でも治ることはない。」

これを聞いてヘジンが言った――「そこで剣の自慢をしているが，勝利の自慢はさせんぞ。主人に忠実なものは何でもいいものだ。」

それから彼らは，「ヒャズニングの戦い」と呼ばれる戦さを始め，そしてその日一日中たたかい合い，夕方に王たちは船に戻った。しかしヒルドは夜，死者たちのもとに出かけて，魔法で死んでいた者たちを全員起した。そして次の日王たちは戦場に赴き，闘いあった。前の日に倒れた者たちも全員闘った。来る日も来る日も，戦死者すべてと，戦場に転った武器すべて，そして盾が小石になるという風に，戦さが続いた。そして夜が明けると死者みんなが起きあがって闘いあい，また武器全部が新しくなっていた。ヒャズニングはこうして「神々の滅亡」を待つのだと詩歌に言われている。この物語にしたがって詩人ブラギは，「〈毛ズボン〉ラグナルの頌歌」の中で詩をこしらえた。

固有名詞索引・略解

（五十音順。（　）内の数字はサガの章を，Sksm. はスノッリの*Skáldskaparmál*「詩語法」を示す。）

アシーア　Asía (1):　アジア。スノッリ『エッダ』序文によれば，アシーアー（Asíá）は世界の中心にあって，「あらゆる美と装飾と大地の実り，黄金と宝石」があり，この地の住民は知恵と力，美とあらゆる知識に最もめぐまれているのである。参照「アース」。

アシーアヘイム　Asíaheimr (1):　「アシーアの国」，アジア。スノッリ『ヘイムスクリングラ』の「ユングリンガ・サガ」ではÁsaheimr「アースの国」と。参照「アシーア」。

アシーアランド　Asíaland (1):　「アシーアの地」，前記「ユングリンガ・サガ」ではÁsaland「アースの地」と。参照「アシーア」。

アース　Æsir (1):　単数 Ás. 本来は北欧神話における神族をいう。キリスト教採用後の北欧民間伝承では次第に，正しい神と対立する邪悪な，悪魔的存在とされるようになった。スノッリ『エッダ』序文では，「アースと呼ばれたアシーアー人たち」はもともと小アジアはトロイアの出身だと言われている。我々の物語では勿論，人間とされる。

アースガルズ　Ásgarðr（1，2）:　アースたちの都。スノッリ『エッダ』の「ギュルヴィの惑わし」によれば，世界の中央にあるけれども，「これを我々はトローヤと呼んでいる」。参照「アース」。

アールヴリッグ　Álfrigg (1):　侏儒。他所からは知られない。

イーヴァル，〈光の〉～Ívarr ljómi (9):　オーラーヴ・トリュッグヴァソン王の近侍でヒャズニングの戦いに終止符を打ったとされる。

ヴァナクヴィースラ　Vanakvísla (1):　「ユングリンガ・サガ」によれば，Tanais 即ちドン川の旧名で，Tanakvísl とも呼ばれ，その附近一帯は「ヴァンの地，国」Vanaland, Vanaheimr と呼ばれていたという。

ウップランド　Upplönd (3):　ノルウェー東部の内陸地方Oppland。参照「エルリング」。

エッリジ　Elliði (4):　船名。同名の船が『豪傑フリズショーヴのサガ』や『ソルステイン・ヴィーキングスソンのサガ』に挙げられている。後者では竜頭船。なお，この語は普通名詞としては，船尾楼の高い船を指す。

エルヴァルスケル　Elfarsker (3):　「川の岩礁」の意だが，古くデンマーク・スウェーデン・ノルウェーの国境をなした川Elfr（現スウェーデン 西部の Götaälven）河口にある小島群か。

エルリング　Erlingr (3):　ウップランドの王。『強者ソルリのサガ』によれば，彼はノルウェーの三分の一を支配し，デンマークのクヌート大王と同時代人だという。史実とは異なる。

エルレンド　Erlendr (3):　エルリングの息子で，ソルリの弟とされる。

オージン　Óðinn（1，2，7，9）:　北欧神話における主神。彼のアースガルズにある館は

ヴァルホル（ Valhöll「戦死者の館」）と呼ばれるが，彼は巨人族との運命的な戦いに備えて，武勇にたけた戦士たちを選びとって，即ち殺して，この館に迎える。そのために彼は自ら「闘いを求め歩き，君侯をけしかけて，和解は絶対させなかった」（「ハールバルズの歌」24），そして戦死者の半分は彼のものになる（「グリームニルの歌」14）。このエッダ神話におけるオージンは複雑な神格となっているが，これは，もともと複数の神々が分有していた諸特質を一神に集中化している結果ではないか。女神の筆頭フリッグや他の女神などとの間に神々をもうける（エッダ詩集やスノッリ『エッダ』を参照）が，我々の物語でいわれているようにオージンがフレイヤの夫だということは他所からは知られていない。普通フレイヤの夫はオーズÓðr といわれ，物語作者の側の意識的ないし無意識的な混同は十分考えられ得る。スノッリ『エッダ』序文によれば，人間オージンはザクセンやフランクの支配者，北欧諸王朝の祖を息子にもった。異教を容赦しないキリスト教文学にあっては，サタンの化身とされるようになる（例えば，僧オッド・スノッラソン作『オーラーヴ・トリュッグヴァソンのサガ』）。参照「オージンセイ」，「フレイヤ」。

オージンセイ　Ódinsey (4):　「オージンの島」の意，デンマークはフューン島の都市Odense。作者の語源解釈は正しくない。ブレーメンのアダムの*Odansue* が示すように，この地名の第二要素は古デンマーク語*wī*（古アイスランド語 *vé*）「聖域」だから，より正しくは*Ódinsvé* 。地名研究の教える所によれば，オージンはデンマークでかなり崇拝された形跡がある。なお，サクソはOthoniensia と書いている。

オーラーヴ　Ólafr Tryggvason （８，９）：　ノルウェー王（995－1000年）。即位前年にキリスト教徒になった後，しばしば武力の脅しをもってノルウェーのみならず，当時この国の影響圏内にあった北海や北大西洋の島々にもキリスト教を導入したといわれる。12世紀以降，この宣教王を主人公にした相当数のサガが書かれたが，Oddr munkr, Gunnlaugr Leifsson, Snorri Sturluson 等の作品が有名。

オルクン諸島　Orkneyjar (Sksm.):　英語ではOrkney(s)「オークニー」。スコットランドの北方にある。850 年頃からノルウェー人の支配下に入り，11世紀末にノルウェー王によって直轄されるようになるまで半独立の侯国として，シェトランド，そして一時はスコットランド北・西部に到る地域を含んだ。1468年に，デンマーク王女の嫁資としてスコットランド王室に譲られ，北欧圏から永遠に脱落。

グノズ　Gnoð （４）:　アースムンド・オッタールスソンが造らせたという「ギリシァ多島海の北方において，ひとが知る限りでは最大の船」（『片手のエギルのサガ』）。

グレーキア　Græcia (5):　ギリシァ。Grikkland とも。往時北欧人はこの地に商人や傭兵として往来した。

グレール　Grérr (1):　侏儒。他所からは知られず。

〈毛ズボン〉ラグナルの頌歌　Ragnars drápa loðbrókar (Sksm.):　ラグナル公によって彫刻のあ

る楯を下賜された老ブラギが作ったとされる詩で，現在知られる最古のスカールド詩。現存の断片は，十分に発達した詩法をうかがわせる。この中で，エッダ詩集に伝えられるハムジルとソルリの復讐やゲヴュンの国獲りの外，次のようにヒャズニングの戦いも歌われている。

8．血管の血を最後の一滴までなくさんと欲する女神（ヒルド）は，敵意をばかき起すため，わが父に弓の嵐（戦闘）をもたらさんとせり。刀（つるぎ）震わす女神（ヒルド）悪意にみち満ちて追風の馬（船）の戦闘の木（戦士）に首環を持参せしとき。

9．かの血まみれの傷をば癒す女神（ヒルド）は，すぐれし王（ホグニ）に首飾り差し出ださず，刀の会合（戦闘）にて王に臆病風をふかせんとしぬ。女は変ることなく戦いを思いとどまらせんかの如くよそおえり，王侯たちを煽りたて魔狼の妹（ヘル，冥府の支配者）のもとに旅立たんと欲（ほ）りせしが。

10．民人の支配者にして領土もたぬ人（水軍王），砂浜で狼の飢え（戦死）をば鎮めさせず。この時ホグニの胸に怒り膨らみ，刀の音かまびすしく鳴らす力づよき神（戦士達）はヒルドの首環をうけ取らず，ヘジン目ざして打ちかかれり。

11．かくして女の中の魔女，終りの勝利ゆるさぬ女（ヒルド）は島の上（え）にて戦神の武器（戦士）の側にたちて治めぬ。船のりの全軍は疾走せる水軍王の駒（船）よりはやる心もて，静かなる戦神の扉（楯）のもとにと集いぬ。

ゴンドゥル　Göndul（5，7）：　魔力のビールによってヘジンを悪業にひきずり込む。前半の話におけるフレイヤの化身。「詩語法」ではヒルドがその性格を有している。「巫女の予言」30に，Hildr などと共にヴァルキュリヤの名として出ている。参照「フレイヤ」，「ヒルド」。

シンドリ〈ヴィーキング〉　Sindri víkingr (3)：　スヴェイギルの息子。他所からは知られない。綽名「ヴィーキング」は，海の猛者ほどの意味。

スヴェイギル　Sveigir (3)：　ハーキの息子。他所からは知られない。

スパーニーア　Spánía (5)：　スペイン。Spánn, Spán(a)land とも。

セーヴァル　Sævar (4)：　ソルリの第一の側近。語源(＜*Saiwi-harjar「海の軍隊指揮者・戦士」)から，海上の戦闘との強い関連を想わせる。

セルクランド　Serkland（5，7，9，Sksm.)：　サラセン人（Serkir）の国。広くイスラーム圏を指す。語源については諸説あり：(1)東方（の人）（アラビア語*sharqi*）の国，(2)絹（ラテン語 *sericum*）の国（比較ラテン語「サラセン人」*Saraceni* ＜古高独語 *Sarci, Serzi*），(3)ドン河沿岸の町Sarkel 附近の国。

ソルリ，〈強者〉～　Sörli sterki（3，4）：　Sörla þáttr の主人公。本話を拡大詳述した作品に，『強者ソルリのサガ』がある。

ソルリ短詩　Sörlastikki (4)：　強者ソルリの勇士ぶりを歌ったと考えられる作。現存するのは，本文中の一節のみ。

ソルステイン　Þorsteinn (9)：　〈光の〉イーヴァルの息子。オーラーヴ・トリュッグヴァソン王

の長蛇号の船首に乗組んで王とともに滅びたという。彼を主人公とする作が，『牡牛足のソルステインのサガ』である。

ダーインの遺産　Dáinsleif (Sksm.):　一旦抜かれたら人を傷つけずには置かないという妖剣。「ダーイン」は恐らく鍛冶工の名であろう。「ヒュンドラの歌」7に，同名の鍛冶の侏儒が挙げられているし，「高き者のことば」143 には，ルーンを知る妖精がこの名で呼ばれている。

長蛇号　Ormr inn langi (4):　オーラーヴ・トリュッグヴァソン王の竜頭船で，北欧随一の名船として伝説化している。スノッリのサガによれば，「ノルウェーで最大かつ最も高価な船」であった。船名の由来は，手本にした別の「蛇号」(後に「短蛇号」Ormr inn skammi と称される)である。なお，後代のサガ伝本によると，長蛇号の竜骨の全長は74エル，約37米あったという (Peter Foote & D. M. Wilson: *The Viking Achievement*, London 1970, 250 による)。

デンマーク　Danmörk (4, 5):　もともとスカンディナヴィア半島南部に居住していたと考えられるデーン人が建てた国。最初期のノルド語が「デーン語」dönsk tunga と称されていたこと等からみて，古代北欧にあっては勢力が強大であったと推測される。伝承によれば，オージンの息子スキョルド Skjöldr が支配王朝（スキョルドゥング朝）の祖である（スノッリ『エッダ』序文，「ユングリンガ・サガ」，サクソ『デーン人の事蹟』参照)。

ドヴァリン　Dvalinn (1):　「巫女の予言」9－16のいわゆる侏儒一覧（Dvergatal）にも出ている代表的な侏儒名。彼はルーンを知り(「高き者のことば」143)，運命の神女ノルンの幾人かを娘にしている(「ファーヴニルの歌」13）という。

東海　It eystra salt (3):　固有名詞としてはバルト海（Eystrasalt）のこと。類似の命名法は他のノルド語やドイツ語にみられる（Östersjön, Østersøen, Ostsee)。

東海路　Austrvegr (4):　バルト沿岸諸地方を指す。この方面には，主としてスウェーデン人が進出。他の北欧諸国人が主に進出したのは「西海路」Vestrvegr（ブリテン諸島，ノルマンディ等々)。

トリュッグヴィ　Tryggvi (8):　ノルウェー最初の統一者ハラルド美髪王(Haraldr hárfagri Hálfdanarson, 9－10世紀）の孫。ノルウェー南部のヴィークVík の支配者。参照「オーラーヴ」。

ナール　Nál (2):　ロキの母ラウヴェイの綽名。本文は彼女が病弱でやせているからだとして，「針」の意味を示唆しているが，より正しくは侏儒名「ナーリ」Náli と同じように，死と関連するのではなかろうか（例えば *nár*「死体」と比較)。

ニョルズ　Njörðr (1):　北欧の神話伝承にあっては，はじめオージンを中心とするアース神族(Æsir) と敵対したヴァン神族(Vanir) に属し，両神族間に講和が結ばれたとき，ニョルズとその子フレイとフレイヤは人質としてアース神族側にひき渡されたという。スノッリ『エッダ』などでは上述二神族間の区別が曖昧になり，ニョルズ父子はアース神とみなされている。「ユングリンガ・サガ」によれば，ニョルズはオージンの後をついで中部スウェーデンの王となり，「彼の時代には全き平和と諸々の非常に豊かな収獲に恵まれ，それは，スヴィーア人たちが

ニョルズは収獲と人間の繁栄を支配していると信じた程であった。」彼は〈富有者〉(auðgi)と綽名される。

ノルウェー　Noregr (3, 8, Sksm.): ハラルド美髪王が870年代に覇を唱えるまでは小王が割拠する多数の王国に分かれていた。オージンは北欧に到ったとき息子セーミング Sæmingr をノルウェーの支配者にした(スノッリ『エッダ』序文)。トレンデラーグのハーコン大公Hákon jarl inn ríki (995年没)は自己の祖先を彼にまで遡った(「ユングリンガ・サガ」)。

ハー　Há, Háey (8, 9, Sksm.): オルクン諸島の西南端の島Hoy。参照「オルクン諸島」,「ヒャズニング」。

ハーキ　Háki (3): エルヴァルスケルの水軍王。この名から海や船のケンニングが知られており,例えばHaka vegr「ハキの道」(海), Haka klif「ハキの絶壁」(海), Haka blakkr「ハキの駒」(船), Haka vagn「ハキの馬車」(船)。

ハーコン　Hákon (4): デンマーク王ハールヴダンの息子で,ホグニの弟。

パリー　París (4): 中世北欧では,学問・文化の都として知られる。Parísborg とも。

ハールヴダン　Hálfdan (4, 9): デンマーク王とされる。「半デーン人」の意味で,代表的な王名の一つ。

ハールヴダンの贈物　Hálfdanarnautr (8): デンマーク王ハールヴダン所有の竜頭船で,ソルリに奪われる。*nautr*「贈物」は,所有者側からする任意の贈呈品ばかりでなく,本文のように彼の意志に反する獲得品にも用いられ,もともとの所有者の名に付されるにすぎない。数多の王者の不幸な死をもたらす「アンドヴァリの贈物」Andvaranautr(「レギンの歌」)を考えられよ。

ヒャズニング　Hjaðningar (Sksm.): ヘジン主従のこと。戦さや武器のケンニングがこの名から知られているのは,本文通り。なお,サクソの第五書によると,この戦いはホグニの側からしかけたものであり,二度闘われ,二回目の戦いはバルト海上の島Hithinsø(Rügen 島の西のHiddenseeか)で行なわれたという。参照「ハー」,「ヒルド」,「ヘジン」,「ホグニ」。

ヒャッランディ　Hjarrandi (5, 9, Sksm.): サラセン王で,ヘジンの父。

ヒョルヴァルズ　Hjörvarðr (6): ホグニの妻ヘルヴォルの父。

ヒルド　Hildr (6, 7, 8, 9, Sksm.): ホグニの娘で,ヘジンに強奪される。しかし,サクソの第五書によると,ヒルド(Hilda)とヘジン(Hithinus)は相思相愛の若夫婦で,夫の戦死後に彼女は夫恋しさの余り夜毎に魔法を使って戦死者たちの霊を呼び起して戦闘にかりたてたのである。ヒルドは,サガでは悲劇的な乙女のようであるが,「詩語法」ではサガのゴンドゥルに似てひどく好戦的である。後者の方が本来の形であろう。ちなみに,彼女の名は「闘い」を意味し,エッダ詩集には戦場の乙女ヴァルキュリヤの一人として挙げられている。参照「ゴンドゥル」,「〈毛ズボン〉ラグナルの頌歌」。

ファールバウティ　Fárbauti (4): 巨人で,ロキの父。スノッリ『エッダ』でも本文のように伝えられている。

フィンの国　Finnabú (4):　本文では，漠然とスカンディナヴィア半島の北部を指している。フィン人（Finnar）とは多くの場合，今日普通にいうラップ人を意味したようだ。

フウェズナ，大～　Hveðna in ellri (4):　ハールヴダンの妻で，ホグニの母。「ヒュンドラの歌」32には，巨人ヒョルヴァルズの娘にしてハキの母がこの名をもっている。

ブラギ　Bragi (Sksm.):　〈毛ズボン〉ラグナルの頌歌の作者ノルウェー人ブラギ・ボッダソン（9世紀前半）。その作品が今日知られている最古のスカールド（詩人）。北欧神話における詩神も，この名で呼ばれている。

フレイ　Freyr (1):　ニョルズが実姉妹との間にこしらえた息子(「ロキの口論」36)で，豊饒と平和，愛情の神。ブレーメンのアダムも，ウプサーラの神殿にあった大きな男根をもつ平和と生殖の神Fricco として伝えている。

フレイヤ　Freyja（1，2）:　北欧神話伝承ではニョルズの娘とされ，男女の愛情を司る女神。「ロキの口論」によると，彼女は首飾りを手に入れるために男に身をまかせ，兄弟フレイをはじめとする神々や妖精とも関係した浮気女。彼女は戦神の性格をも有し，「毎日戦死者の半分をえらぶ」(「グリームニルの歌」14）とされている。参照「オージン」，「ゴンドゥル」。

フローイスケルダ　Hrǫ́iskelda (4):　「フローイルの泉」の意で，シェラン島ほぼ中央にあるデンマークの旧王都Roskilde。サクソは，Roskilda は Roe 王の名に由来すると述べている。

フロージ，〈平和の〉～ Frið-Fróði (3):　デンマーク王。エッダ詩集では「グロッティの歌」にその名が挙げられているだけだが，本来は広くゲルマン圏で知られていた伝説的英雄。スノッリ『エッダ』序文によれば，彼は西北ドイツのヴェストファーレンを支配した王。しかしサクソの第五書によれば，東はロシアから西はラインの岸に到る領土に君臨し，厳罰主義によって王国の治安を保ったが，それをホグニとヘジンの戦いによって破られたという。

ヘイズレク，〈狼皮の〉～　Heiðrekr úlfhamr (6):　ヒョルヴァルズの父。

ヘジン　Heðinn（5，6，7，8，9，Sksm.):　サラセンの水軍王で，「ヒャズニングの戦い」を惹き起す。サクソの第五書によれば，ヘジン（Hithinus）はノルウェー人の一部を治める王で，その体は美しくはあったが未だ大人になっていなかった若い頃にヒルドと恋をし，彼女の父ホグニにその仲を一旦許されながらも，讒言を信じた義父によって攻撃をかけられた。しかしホグニは，重傷を負わせながらもその若さを憐れみ，また未成年の者を殺すことを恥として彼の命を助け，再び7年後 Hithinsø（ヘジン島）で相会し，両人ともに倒れたという。

ヘルヴォル　Hervör (6):　ホグニの妻で，ヒルドの母。

ベルリング　Berlingr (1):　侏儒。他所からは知られない。

ホグニ　Högni（4，5，6，7，8，9，Sksm.):　ヒルドの父で，「ヒャズニングの戦い」の一方の大将。サクソの第五書によると，ホグニ（Høginus）はユラン人の小王(Iutorum regulus）で〈平和の〉フロージの副王だったが，他人の言うことを信じ易いたちで，娘とヘジンが正式の結婚手続を経ずに一緒になったという偽りの話に怒り，若い婿を攻撃し，こうして「フ

ロージの平和」を破ったという。若年のヘジンを死の瀬戸際まで追い込んだ最初の戦いにあってもっと無慈悲であればよかったのに，とサクソは語っている。

ヤールンスキョルド　Járnskjöldr (9):　巨人。他所からは知られない。

ラウヴェイ　Laufey (2):　女巨人で，ロキの母。参照「ナール」。

ラグナル，〈毛ズボン〉～　Ragnarr loðbrók (Sksm.):　後代の伝承ではデンマーク王とされているが，実際は王臣であった（サクソの第九書 Regnerus)。9世紀前半に西海路(「東海路」をみよ）に遠征し，845年にセーヌ川を上ってパリーに侵入し，サン・ジェルマン教会を掠奪し，銀7千ポンドをフランク王より得て撤退した。14世紀アイスランドの『〈毛ズボン〉ラグナルのサガ』の冒頭部分によれば，ラグナルは大蛇退治の折に毛の外套と毛のズボンで身をかためたという。これは明らかに，『ヴォルスンガ・サガ』等から借りたモティーフである。

ロキ，〈悪巧みの〉～　Loki lævíss (2):　北欧神話伝承において最も問題を含んだ存在。彼は「アース神の中傷者，嘘の元凶，すべての神々と人間の恥」と呼ばれ，「狡智という知恵にかけては誰にもまさって」（スノッリ『エッダ』の「ギュルヴィの惑わし」)，「次々と禍いを企らむ」(「巫女の予言」34)。ロキは巨人の子でありながら主神オージンと血を混ぜあってその盟友となり(「ロキの口論」9)，アースの神々の間に受けいれられて，しばしばオージンの旅の道連れでもある(「レギンの歌」冒頭散文)。化身の能力があって，ある時は牝馬となってオージンの名馬スレイプニルを生み(「ヒュンドラの歌」40)，またある時は老婆ソックとなって善神バルドルの冥界からの帰還を妨げる（スノッリ『エッダ』の「ギュルヴィの惑わし」)。彼はさらに「神々の滅亡」に際しては，わが子フェンリル狼やミズガルズ蛇とともに巨人側に立って神々を滅ぼすことになる。

参考文献

Edda Snorra Sturlusonar, Nafnþulur og Skáldatal. Guðni Jónsson bjó til prentunar. Akureyri 1954. —— Endurprent. 1959.

Eddukvæði (*Sæmundar-Edda*) I－II. Guðni Jónsson bjó til prentunar. Akureyri 1954. ——Endurprent. 1959. (Völuspá, Hávamál, Grímnismál, Hárbarðsljóð, Lokasenna, Reginsmál, Fáfnismál, Hyndluljóð, Grottasöngr を含む。)

（これらの訳として，谷口幸男訳『エッダ— 古代北欧歌謡集』新潮社1973年　が参考になる。)

Fornaldar sögur Norðurlanda I－IV. Guðni Jónsson bjó til prentunar. Akureyri 1954.－Endurprent. 1976. (Egils saga einhenda, Friðþjófs saga ins frœkna, Ragnars saga loðbrókar, Sörla saga sterka, Völsunga saga, Þorsteins saga Víkingssonar を含む。)

Den norsk－islandske skjaldedigtning A I－II, B I－II ved Finnur Jónsson. København 1912－15. —— Optryk 1967－73. (Ragnarsdrápa, Sörlastikki を含む。)

Saga Ólafs Tryggvasonar af Oddr Snorrason munk. Udg. af Finnur Jónsson. København 1932.

Snorri Sturluson. Heimskringla I. Bjarni Aðalbjarnarson gaf út. Reykjavík 1941. (Ynglinga saga, Ólafs saga Tryggvasonar を含む。)

Saxonis Gesta Danorum. Primum a C. Knabe & P. Herrmann recensita. Recognoverunt et ediderunt J. Olrik & H. Ræder. Tomus I. Hauniæ 1931.